

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH WEEKLY



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：山田 安隆 幹事：大村 精二

会報委員長：清水 忠

1975・3月6日

第35号

“^{かみ}紙^こ衣の帯”

和紙工芸家 坂本 宗一郎氏



快晴の冬の日^{はる}に、金沢から見遙かす白き医王の山なみは美しい。
その医王の山ふところ二俣は、古くから紙漉^すきの産地であった。
楮^{こうぞ}と清冽な水に恵まれたこの静かな山里で、一筋の執念を燃やし
ながら私は紙衣の帯づくりに専念している。

紙衣の帯は織るのではなく、漉くのである。

楮を選別し、水洗い、煮沸、あく抜き、打解、紙漉きそして帯の
仕上げに至る工程は、妥協を許さない自然の恵みと人間の^{わざ}技との結
合である。

しかしその苦しい工程の後に出来上った帯は、手づくりの芸術だ
けが持つ美がある。

紙衣の帯という古い素材を使い、女性の美という永遠の美を掲げ
ながら、如何に時代の要請するコスチュームを創造するか、白い山
ふところで、私は今日も制作を続けている。

—金沢北RC例会卓話より— (文責 清水 忠)

私の職業奉仕

本江 他美夫

私たちが一日に少なくとも一度は口にする食味には必ずしょうゆが使われている。それが日本人である私たちの食習慣で、だから逆にその食習慣を示すだけで、その人が日本人であることを知らせることも出来るといった案配である。それほどしょうゆは日本的な、というよりは日本そのものの一部を担っているともいえよう。

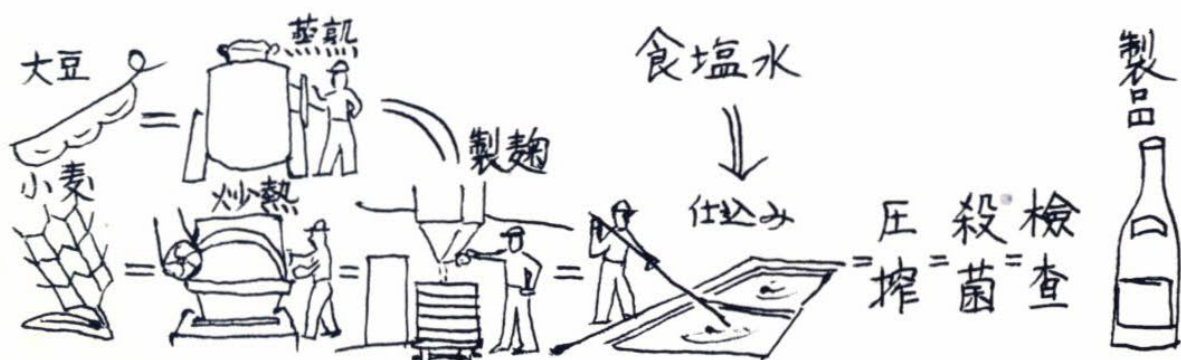
実際にフランスやスペイン、イタリア、それに中国料理の本場である中華人民共和国、香港等、まず世界に味自慢で名を挙げているこれらの国々の料理と比べてみて、私たちが朝に夕に口にしていくわれらが郷土料理とは味つけの発想の点で、決定的に違っていると思われる。それは味の基調がしょうゆということである。しかしそのしょうゆが今やソイと呼ばれ、海を渡った国々の調理のなかで香辛料として広く愛好されているのである。

しょうゆとは塩味とうま味をつける調味料だと一般に思われている。確かにその一面もあるが、それが全部ではない。というのは案外知られていないが、実はしょうゆは「香りの調味料」ということである。料理を永年人に食べさせてきた専門家たちの多くはそれをいつの間にか会得して、しょうゆをかくし味的に使用している人が多い。しょうゆが香りの調味料であることの一番よい証拠に「うしお汁」に魚がよほど新しくないと、ほんのわづかではあるが、生臭いにおいが鼻につく、しかし、しょうゆをほんの一滴加えることで、生臭みは消え「うしお汁」はほのかなよい香りになる。また魚をバター焼にする際、バターを熱したところへ、ほんの数滴しょうゆをたらすと、ヨーロッパでのような味になる。日本のバターはヨーロッパと違い非醗酵バターといって、乳酸醗酵をさせていないから、香りや酸味は少ない。しかししょうゆを数滴加えることで、醗酵バターのような香りと味がつき、魚の生臭みがとれておいしくなるのである。

しょうゆの香り成分は、現在わかっているだけでも約 120種以上、その中にはバラの花の香りを初めとして、ウイスキー、バニラ、ヒヤシンスなどといったしょうゆのイメージとは少し違ったような香りも多く含まれている。この香辛料的な香りは、欧米人にもよくわかるとみえて、外国でのしょうゆの使用量はずいぶんよく伸びているのである。

まるで空気のように、そのありがたさにならされているしょうゆであるが、その歴史は、時代と共に流動しながら今日に至り、世界の台所に普遍化しつつある。このしょうゆ業界の一角に小なりとも、それを担うことに誇りと責任を感じております。技術と研究に精進し、より良きしょうゆを造ることが使命であり、職域を通じ奉仕の精神で進んで行きたいと願っております。

しょうゆの出来るまで



とし男、今年の抱負を語る (2)

米沢 繁男



ついに昭和50年となった。とりもなおさず吾々も50才に近くなったことになる。思えば約半世紀生きて来たことになり、吾ながらかなり永生きしたものであると思う。

人生50年、兎年ということは余り意識しなかったように思うが、それでも時々考えさせられることがあった。それは余り自慢にならない場合で、意地気のないときなどがそうであった。

今年はずでに昨年暮から年男の原稿など頼まれたりしたせい何か何となく気になって、兎とは12支の中でもどんなものだろうかと或る百科辞典をひろげた所こう書いてあった。「月面の斑点を兎とする仏教伝説は中国を経て我国へもたらされたものである。インドでは釈迦は前世では兎であったと伝えられている。或る時天帝が、兎の徳をためそうとして、老翁に姿を変えてやってくる。狡猾なキツネやタヌキはすばやく御馳走を深して来て捧げたが、兎は何も入手出来ず、しょんぼりと帰って来て薪火を始めた。食事の用意をするのかと見ていると、とっさに自ら火中に身を投げて焼き、天帝に捧げようとした。天帝はその犠牲的精神に感動し、兎をつれて月につれて帰ったのだという。従って梵書では月をシャシン(舎身)、兎をシャカ(舎迦)と書いてある。兎の前脚が短いのはこの時に焼けたためである」と。兎は弱いどころか、中々のものであると感心した次第である。

もう一サイクルもすれば次は還暦である。いささか淋しい気持ちにもなる。子供の頃は50才台の人は全く老人そのものに見えたように記憶している。気分は未だかなり若いつもりでいるが、はたから見れば動脈硬化や脳硬化のかなり進んだ老人に見えるのであろう。

今年現在の病院を新築して丁度満10年になるのでその記念として、日頃何かと無理をさせて来た職員の労に対して幾分なりとも報いてやりたいとかねてから思案していた橘会館(简单なる厚生施設)が何とか出来上がったので、その新築祝をかねて10周年記念祝賀会をささやかに内輪で行った。時の経つのは早いもので、その当時のことが昨今のこのように思えてならない。この10年間にはいろいろの尊いことを経験させていただいた。とりわけ人間として、医者として反省させられることが多かった。人間の自然治癒能力の偉大さにつよく感銘をうけた。これからの一サイクルを大いに頑張りたいと願っている次第である。

それにつけて、「初心忘るべからず」の名言を思い出す。この言は、かの有名な能作者の世阿弥が芸を修める心構えとして教えた言である。世阿弥のいう初心とは、現今吾々の考えがちな所謂初心とはいささか趣を異にしており、もっとも意味深重な初心なのである。即ち「是非初心不可忘」「時々初心不可忘」「老後初心不可忘」の三つの初心を忘れてはならないの意である。人生は常に、その年に応じて、又成長するにともなって、それぞれ初心を忘れてはならないの意味であると自ら解して、欲張らずにせめてこれからの一サイクルを目標に全力投球をしていきたいと思っている。

